



発行人
〒104-0052
東京都中央区月島3-15-9
代理 中島康夫
TEL 03-3534-0666
編集者 中島康夫
TEL 090-8005-9762

切腹最中



切腹最中

全義連事務局長 中島 康夫

今や大繁盛！新橋の名物、いや、東京中の名物にならんとしている。元はといえば、代々続いた和菓子店が、浅野内匠頭が切腹した、一関藩主田村右京太夫の屋敷内にあつた。忠臣蔵事件のあつた三百年前は、この通り「大名小路」といって中級の諸大名が列を成していた。

関東大震災で焼失した「田村銀杏稲荷大明神」の再建にも力を注いだ。この御利益は大変なもので、今や、(財)中央義士会の評議員、さらに、先日、忠臣蔵サミットにも出席して、赤穂市長豆田正明様ともしっかり握手、存在を覚えてもらった。この十二月には赤穂市より、「赤穂観光大使」の予定。

これでは内匠頭の墓のある泉岳寺の方向に足に向けて寝ることもできない。

なによりも、本人の努力が実を結んだ訳だが、これからは四代目を意識しつつ、義士会に寄与してもらいたい。全国義士会にも全面的に協力してほしい。

詩歌に見る

元禄忠臣蔵 ものふどもの散りぎわ (その2)

|| 辞世を中心 ||

(財) 中央義士会 評議員 三輪三郎

前回(会報第58号、平成19年12月)に続いて、今回は堀内傳右衛門覚書(浅野内匠頭様御家来十七人御預之節覚書)に見られる辞世を中心に、覚書の内容も引用しながら、彼等がどんな思いで来世へ旅立って行ったのかを見てみたいと思います。

なお、文中『』書の部分は同覚書引用の意識であります。

「堀内傳右衛門覚書」(本編)は赤穂義士四十六人のうち、大石内蔵助ら幹部級十七人を細川家下屋敷で預かった際、接伴役の一人となった同家家臣、堀内傳右衛門勝重(二五〇石)のお預かり中の元禄十五年十二月十六日から義士たちが切腹を遂げる元禄十六年二月四日までを中、心とした手記です。

義士たちの日常生活の様子から外部との連絡まで、実に詳しく書かれています。また義士たちに好意的に接し、切腹後も義士の遺児、関係者の連絡までおこなっています。

草枕むすぶ仮寝の夢さめて

常世にかへる春のあけぼの

間喜兵衛光延 (行年六十九)

浮世の果かない旅の夢からも覚めました。さあ、これから永久の国へ帰りま

す。

その清々しい春の朝がやってきましたか(草枕は枕詞)

『間喜兵衛はいつも話もされず、人の後ろにばかりぼつんとしておられました。・・・ついに話したこともなく、言葉を交わしたことも無かったので、最後のときに傍へ寄って行き、なにかおっしゃることは御座いませんかと言うと、懐から辞世を書いたものを下さいました』

無口で温厚、武士の筋目を通した人といわれています。

また喜兵衛は四十七士中、堀部弥兵衛に次ぐ高齢であり、長男十次郎、次男新六と親子三人で義拳に加わり、十次郎は物置小屋の中に潜んでいた上野介に一番槍を突きつけたことで有名です。

春帆獨咲

四日は姉の忌日なれば

先たちし人もありけり今ふの日を

終の旅路のおもひ出して

富森助右衛門正因(号春帆)(行年三十四)

「姉が旅立っていった今日のこの日を終いの旅路の思い出にして、私も旅立って行きます。」

『今、吉良左兵衛の領地召し上げ、諏訪安芸守へのお預けのことを聞き本望でございませう。ただ年老いた母のことが気になりますので、宜しくお願ひしますと申されました。承知しました、ご安心くださいと申しあげると、辞世と戒名を書いたものをくれました。』

(中略)その後、助右衛門の旦那寺浅草長延寺へお詣りしてみると、黒塗りの

位牌があり、金文字で戒名を書いたのがありました。日付はありませんでした』

また、彼は大高源五（子葉）、神崎与五郎（竹平）とともに俳句を良くし、細川邸で正月を迎え、新しい小袖二枚とご馳走がだされたときに、

今日も春恥ずかしからぬ寝武士かな（義人録）

今日この正月に、このようなご馳走をいただき、何もせず寝てばかりいるこの俺は、武士として恥ずかしい気がする。とその胸中を吐露しています。

また彼は泉岳寺への引き揚げの途中、大石内蔵助の命により、吉田忠左衛門とともに、大目付仙石邸へ自訴しています。

もののふの道とはかりを一すじに

思ひ立ちぬる志ての旅路に

潮田又之丞高教（行年三十五）

『武士の道だけをただ一筋に生きてきたが、いよいよこれから死出の旅に出かけることになりました。』

『潮田又之丞は辞世と書き付けを以前に渡してくれました。（切腹当日）播州加西郡北條村には母と娘が姉の嫁ぎ先に身を寄せています。播州加古川本陣の中屋与右衛門に頼んでもらえば北條村へはすぐ連絡が付きます。加古川から北條村へは五里ばかりだから、私どもそちらへ参りましたら、すぐに連絡いたしますと言いました』

また彼には細川家お預け中、次のような逸話が残されています。

『或る夜、潮田又之丞が齒軋りをしていたので、誰かがご気分でも悪いのです

かと尋ねました。その後又之丞が申すには、先夜、齒軋りをしていたら、どなたか注意してくれましたが、私にはその癖があります。ご心配は有り難いがかえって迷惑だと言いました。それはお目覚めで迷惑なことでしたと笑ったことでした』

彼は上野介の首を槍の先につけて泉岳寺へ引き揚げて行きました。

地水火風 空のうちより出し身の

たどらで帰る元の住みかに

早水藤左衛門満堯（行年四十）

『万物の根源（地水火風空）から出てきたわが身です。迷うことなくもとの住処へ帰ります。』

『（切腹の日）早水助兵衛（彼の養祖父で元細川家の家臣であった）が光明寺へ引き取られていたことを覚えていたので、熊本の光明寺と申す寺を御存知ですかとたずねると、親しくは無いけれども承って居ると申され辞世を書いてくれました』

なお、この辞世は元禄十五年十月七日、大石内蔵助、潮田又之丞等と山科を発つて下向する際、備前岡山に住む実兄山口弥右衛門へあてた暇乞い状の終わりに記されています。

それにはまた『老父の嘆くのを顧みず忠義の道を深く致すことは孝行の道に欠けるように思えるけれども、幼齢のころから父の教えに従って武の道を守ってきた以上、忠義の道を尽くさずして何を志すというのか。・・・生きて悪名を父母たちにさらすのと、死をもつて義を全うするのといずれがよいのか、みんなて話し合ってください。ただ親子の情、兄弟の親しみ、子孫への哀れを思

うとき涙がこぼれ出てきます」と、忠と孝との間に立つての苦しい思いが切々と述べられています。

元禄十四年三月十四日、松之廊下事件の第一報を江戸から赤穂まで百五十五里の道のりをわずかに四日半で届けたのは、萱野三平とこの早水藤左衛門です。

筆の跡みるになみだのしぐれきて

いひかへすべき言の葉もなし

小野寺 丹

“あなたのお手紙を見ていると、涙が止め処も無く零れ落ちて、お返事を書くことも出来なくなっています”

これは義士の辞世ではありませんが、小野寺十内が細川家にお預かり中に妻丹から寄せられた手紙のなかに書かれた歌で、同覚書の中にエピソードも交えて述べられているので、紹介することにしました。

『ある日、堀内傳右衛門が潮田又之丞と話をしているところへ原惣右衛門がやってきて、なにやら歌の話になってしまいました。小野寺十内の妻の歌を御存知ですかと聞かれたので、いや存じませんと言うと、惣右衛門どの書き付けて傳右衛門どのへ差し上げてはいいかがかと言いました。惣右衛門は十内が聞いたらさぞかし腹を立てますよ、と笑いながら書いてくれました』

いよいよ二月四日、最後の時、傳右衛門が小野寺十内のところへ行くと、『小野寺十内は、私の妻の歌をこの間、惣右衛門にお書かせになったそうですね、と笑いながら言いました。』

さて今日のこととは京都の弓削太郎左衛門までお知らせいただければ、妻の方へはすぐに通じることになっております』

となんともおおらかな話が書かれています。

丹は夫、十内とともに文章を良くし、歌を詠み、紫式部の再来かといわれた程に風雅の道を愛する教養の高い女性でした。

夫婦ともども多くの手紙や歌を残しているが、最近になってまた丹の手紙が新しく発見されたとの報道もありました。

また夫婦の愛情はこまやかで良く知られ、二月四日、夫十内の切腹後四十九日の法要も済ませ、京都、本圀寺の塔頭了覚寺に籠り、自ら食を断って十内のもとへ旅立って行きました。元禄十六年六月十八日です。

うつつとも思わぬ内に夢さめて

妙なる法の華にのるらむ

|| 辞世 ||

この覚書（義士の辞世など）を読んで改めて感じたことは、武士道の根源が忠孝であったことは申すまでも無いが、孝行の道が親に対する思いだけでなく、妻子、兄弟にまで及んでいたことです。

いま一つ彼等（義士たち）の日常生活の中に仏教（仏様、お寺様、お坊様）に対する思いが深く入り込んでいたことです。

それが彼等の辞世の中にも、現世、来世の一体感となって現れています。また同覚書にこんな一節があります。

『十二月十七日の夜（十七人の義士たちが細川家に預けられた翌日）だったと思う。皆様ご精進日がおありでしたら、遠慮なくおっしゃってくださいと言うと、有難うございます、采女などの命日がそうです、とのことでした。（中略）十八日の朝は精進料理を出しました』

現在、在家（仏教徒）の中で先祖の命日に精進料理を守っておられる家庭が果たしてどれくらいあるだろうか。ふと私の子供の時分の我が家の精進日を思い出しました。